

又煙の流れ方にも注意し度い。

双六

種類や内容については他の處で書かれる事であらうから省くが遊び方として、まだよくのみこめない子ども達もあらうから遊び乍ら説明する。さいころの丸の數と同じだけ先へ進むといふ簡単な數處理をすることで、敬観念へ正しく導くやうにし度いことである。

談話

志村貞子

明治節 大東亞戰爭下、大稜威輝く昭和の大御世に、このおめでたい日を迎へ、明治天皇の大御業を、昭和の大御世を擔ふ光榮の子等と共に仰ぎ奉り、讚へまつることの辱さ、有難さに私は胸がいばいになる。そしてまた、大稜威のもと、天皇を輔翼し奉つて大御世に生を享くるの光榮を辱しめなかつた我等の父祖の忠勇に感謝と感激の念を新たにすると共に、父祖の心を受け繼ぐべき自らを省み、更に光榮の子等に心を籠めて祈らずにはゐられぬのである。私はこの自分の心持でそのまゝ子供等に向はうと思ふ。話さうと思ふ。祈らうと思ふ。光榮の子等は日本人である。必ずや私の拙い言葉からも感じてくれるであらう。日本人の有難さをよるこびを、そして日本人の祈りを。

事、皇室の御事に對し奉る時、語るものゝ態度、言葉の如何で

あらねばならぬかは申すまでもない。それらから子等の心情、態度は自ら養はれるのである。十分に心すべき事である。

國引き この話は出雲國風土記に據つたものである。我國民の雄大且明朝瀾達なる性情を誠によく表はしてゐるものと思ふ。原文に據つて充分に味はれることが希ましいと思ふ。因みに國引の様を書いたところをみると、「童女の胸鉏取らして、大魚の支太衝き別けて、はたすき穗振り別けて、三自の綱打ち桂けて、霜黒葛くるやくるやに、河船のもそもそるに、國來國來と引き來繼へる國は云々」とある。これを四度繰返して「國引き訖へ」給ふたのである。この構想、この高い調子の味ひを失はぬやうに、そのまゝに子供達に傳へたいものである。これを爲し得る時は、子供達の爲の上代日本の話として優れた一つの話になると思ふのである。私共の試みた國引の話は當協會發行の幼稚園談話集の第二輯に載せる豫定になつてゐるので大方の御叱正をいたさうと思ふ。なほ御承知のことと思ふが國民學校のヨミカタ三の十三頁、三 國引きも御参考になさるのがよいと思ふ。

見えなくなつたお椅子 繪のお帳面 これは何れも幼稚園談話集の第二輯に載るもので、幼児身邊の生活に取材したものである。見えなくなつたお椅子の話は、物を亂棒に取扱ふ一人の男の子を中心に、その子供（淳ちゃん）の幼稚園の椅子が夜そつとぬけ出して淳ちゃんのお家にゆき、お家のお道具と相談して淳ちゃん悪い癖をなほしたといふお話。表はれてくる道具類の描寫もいきいきしてをり、話する者も聞く者も共に楽しめる話である。物を粗末に扱ふ子供は多いものであるが、この種の話がそれに及ばす效

果は口やかましい叱責等よりはるかに大きいものがあるのではないかと思ふ。殊更に駄目を押さなくとも子供の心は感じる。自然に大きな効果を期待出来るのもうれし。

繪のお帖面は、幼稚園で三人の女の子の前に畫いた繪のお帖面を出して、順々に見てゆき遠足のこと、夏休のこと等いろ／＼想ひ出して楽しく話しあふのである。これは實際あり得ることであり、子供の様子とその繪が如何にも可愛らしく表はれて來て微笑ましくなる。しかしこれは大人が讀んでの感で、子供にとつてはどうであらうか。自分の繪のお帖面をみては、この話に表はれる子供以上に豊かな想出と活潑な發表力を持つ子供でも話として單に聞かされる時にどれ程の共感を持ち得るか疑問だと思ふ。幼兒の身邊から取材することは誠に希ましいことであるがそれを如何に構成し、如何に表現するかに我々の大いに研究せねばならぬところがあると思ふ。

鳥と獸の戰爭 鳥と獸の戰爭で兩方とも一生懸命に戦つてゐる時に、蝙蝠だけは獸の仲間になつたり、鳥の仲間に入つたりして戰の度に勝つた側についてゐたので、鳥獸仲なほりのお祝の時にはたう／＼兩方から斷はられてしまつたといふお話。戰爭の始まる前鳥獸の勇み立つ様子、戰の様子、それ／＼得意の武器などなか／＼精しく巧みに描かれてゐる。これは此方が話して聞かせるだけでなく、子供に尋ねて發表させそれ／＼の鳥獸の特長をつかませること等をしながら話をすゝめてゆく事も面白いであらう。子供の發表には此方もなか／＼教へられる事が多いものである。

戰爭の様子が懐懐、殘虐に互らぬやう注意すべきである。

手技

及川ふみ

十一月も十月にひきつゞき屋外保育のよい季節である。自然觀察にいろ／＼の材料の多い時であるからつとめて幼兒の注意をそちらに向ける様に保育案も作りた。

この觀察はやがては、直接間接に幼兒の生活の内容を充實させる爲に役立つことは云ふまでもない。庭園に咲く秋草の印象は自由畫となつて表現されて來ることもあらうし、蟲取りにうち興じた後では、とんぼ、ばつたなどが仕事の材料となつて作られることも期待出来る事である。

又拾ひあつめた、木の葉、木の實で自然物おもちゃの作られるのも云ふまでもない事である。木の葉、木の實を材料としたおもちゃを一二あげて見ると

木の葉のお皿

粘土を一センチから二センチ位の厚さにのばして出来るだけ平な面にしておく。幼兒のすき／＼の木の葉を拾はせて、砂や泥をよく洗ひ落しておく。平な粘土の上にこの木の葉をのせて木の葉のどこの部分も同じやうに、上からおさへる。粘土ペラで周圍の餘分の粘土を切りおとす。木の葉の周圍を少しづつもちあげてお皿の恰好をつける。葉柄をもちあげて粘土から木の葉をはなして見る。形よく大小の葉脈がついてゐると綺麗でよい。もしも上か